

特集 豪州テニス復活とジュニア育成 佐藤雅幸 経済学部教授(テニス部女子監督)



02年度(平14)短期在外研究員としてオーストラリア留学

ジュニアテニス選手に、「将来何になりたい?」と聞けば、間違いなく「プロテニス選手! グランドスラムのチャンピオン!」と答える。野球少年が、本場アメリカで活躍するイチローや松井のような大リーガーにあこがれるように、サッカー少年が中田や稲本そして柳沢のようになりたいと思うように、ジュニアテニス選手たちの夢はグランドスラムチャンピオンである。

グランドスラム(Grand Slam)大会は、テニスをするものにとって特別な意味を持っている。1月のオーストラリアオープン(以下全豪オープンとする)を皮切りに5月のフレンチオープン(全仏)、6月下旬から7月初旬までのウインブルドン(全英)そして9月に開催されるUSオープン(全米)の4つの大会を総称したものであるが、この大会には、歴史、品格、格式そして賞金など全てにおいて世界最高レベルの舞台がととのっている。

2003年の全豪オープンテニス(1月13日~26日/オーストラリア・メルボルンパークテニスセンター/賞金総額12億7260万円)では、残念ながら地元期待の第1シード、R・ヒューイトが4Rで姿を消してしまっただが、男子では32歳のベテラン、A・アガシが2年ぶり4度目の優勝を遂げ、健在ぶりをアピールした。姉妹対決となった女子決勝は、妹のセレーナ・ウィリアムスが勝ち、2002年のフレンチオープンでの優勝から始まり、数えて連続4回のグランドスラムタイトルを獲得した。このことにより、1953年M・コノリー、70年のM・コート、88年S・グラフにつぐ史上4人目のグランドスラムマーになった。グランドスラムマーというのは、グランドスラム大会4つのタイトルを獲得した選手に与えられる称号である。全豪オープンはハードコート、ウインブルドンは芝、フレンチオープンはレンドクレイ、そしてUSオープンはハードコートとコートの種類が異なっているため、それに対応できる戦略・技術・体力そして精神力がなければ成し遂げることはできないと言われていた。とにかく、恐るべしヴィーナス姉妹という感じである。



▲オーストラリアの星M・フリーボース(03全豪オープン)

60年代の栄光再び

オーストラリアは、1960年代初めから70年代中頃まで、世界のテニスを常にリードする存在であった。オーストラリア出身の名選手をざっと思いだしただけでも、R・レーパー、J・ニューカム、K・ローズオール、T・ローチ、R・エマーソン…と数多くのグランドスラムチャンピオンがいる。しかしながら、テニス王国といわれていたオーストラリアも、1975年以降は低迷し、アメリカ、スウェーデン、ドイツなどに

その座を奪われてしまった。それを危惧したオーストラリアテニス協会は、往年の名プレイヤー、J・ニューカム、T・ローチをデビスカップのコーチに迎え、ジュニア選手の育成を含めて、組織的に強化策を講じてきた。その結果、R・ヒューイト、P・ラフター(昨年末に引退)、M・フリーボースなどといった素晴らしいプレイヤーが育ち、オーストラリアテニスは今、復活の兆しを見せはじめています。

私自身これまで、3度の渡豪経験はあるものの、いずれも全豪オープンテニスを視察するためのもので、約2週間程度の滞在であり、ほとんどが宿舎と試合会場との往復であった。そういったことから、今回は3カ月間を有効に活用し、住んでみて実際に経験しながら「オーストラリアのテニス指導法」の真髄を見つけてみたいと考えた。

本物の体験をさせる

1月のメルボルンは、全豪オープンテニス一色に染まる。ジュニアテニス選手たちは、自



分からわずか数メートルのところを繰り返される、世界超一流のプレーを体感する。世界最高のプレーがまるで毛穴から染みていく感じである。第1週が終了すると、2週目後半からはジュニアのグランドスラムが開催される。これは一般のグランドスラム大会のジュニアバージョンであり、統計的にもジュニアグランドスラムで活躍した選手が、一般の部でも世界チャンピオンになる可能性が高いことが分かっている。先日、ウインブルドン女子ダブル

ルスで優勝した杉山愛選手も、過去に世界ジュニアランキングで1位にランクされた。

2月になればオーストラリアや隣国ニュージーランドでは、ジュニア国際大会グレート4および3といった登竜門的な大会が開催されるほか、メルボルン市内では、オーストラリア国内ジュニア大会から地域大会そして初心者が挑戦できるローカル大会まで数多くの大会が用意されている。まさに、ボトムからトップまでスムーズに流れていくシステムが出来上がっている。

日本におけるジュニア大会との決定的な違いを述べてみたい。オーストラリア、ニュージーランドで開催されるどの大会にも、コンソレーションマッチ(敗者戦)が用意されている。さらに、ゲームの方式も、原則的に3セットマッチ(場合によっては8ゲームマッチ)であり、本物のテニスをジュニア時代からたくさん経験できるよう配置されている。一方、日本では、ほとんどの大会にコンソレーションマッチはないばかりか、試合方式も8ゲームマッチまたは1セットマッチが採用されていることが多い。さらに、デュースをしないノーアドバンテージ方式が主流となっている。試合時間の短縮とテニスコート代を安価に上げるための苦肉の策とはいえ、亜流のテニスが行われている現状がそこにある。絶対的なコート面数の差といえばそれまでだが、負けても負けても、試合経験を積み上げることができるコンソレーション方式は、選手育成の鍵を握っていると考えられる。試合会場まで2時間かけてたどり着き、たった約15分の1セットマッチをする。幸運にも勝った選手はもう一度プレーするチャンスがあるが、負けた選手は、会場で練習することも許されず、また2時間かけてたどり着き、たった約15分の試合をするために、往復4時間もかけて試合をしに行っているケースも日本では珍しいことではない。世界に通じる選手が育ってこない原因はここにあるような気がする。

本物を育て上げるためには、当たり前のことを当たり前にするしかない…メルボルンの小さなテニスクラブで気付かされた現実である。

【ニュース専修9月号8面】

## 英語の学習10人10語 第4話 勉強、それはそれとして 伊部 哲(文学部教授)

「4月からNHKの外信部に入ります。英語関係です」とI君がニコニコしながら“意外でしょう”という顔つきでいったのは30数年前の3月のことです。

当時、私は都立高校の英語教師をしていました。I君は私が担当した生徒で、某大学商学部の二部を卒業して、就職の報告にきたのです。担当した生徒で二部に進学したのは彼以外いませんでした。どう応じてよいか、いささか迷いました。という

のはI君が外信部で英語を使って仕事をする姿と高校時代の授業中の彼の姿が、うまく重ならなかったからです。ただ、音読させると上手だったのは確かで、アメリカの歌が好きで、いつも聴いているし、歌ってもいることは彼から聞いていました。

彼は高校でもいわゆる勉強はあまりしなかったのですが、大学でも勉強はあまりせず、英語の歌を聴き、自ら歌い、アメリカの歌の情報をアメリカのラジオや雑誌や書物から得ながら4年を過ごしてことを知りました。

7、8年でNHKを辞め、アメリカの大学院でコミュニケーションを勉強し、今は外資系のTV関係の会社で仕事をしています。

I君にとっては、英語は勉強の対象ではなかったのです。英語は自分の好きなことを追求していく手段でした。

世の中にあふれている、英語学習に関する書物を読むのもいいのですが、好きだとか知りたいなどという、自分個人から発する思いをエネルギーにして英語を利用することが、結局は早道かもしれません。



【ニュース専修9月号8面】